

戦後五十年を迎えて（学徒動員編）

渡邊 康子

君は鍬（くわ）とれ 我は槌（つち）

戦う道に 二つ無し

国の大事に 準ずるは

我等学徒の 面目と

ああ紅の 血は燃ゆる

ペンを持つ手に鍬を、槌を持って、一億一心火の玉だ、「ほしがりません勝つまでは」と勝つことを信じ、学校へ行かず軍需工場へ、出征兵士宅へ勤労奉仕に行きました。

阪神工業地帯の三国の軍需工場でした。何を製作しているか軍の秘密で知らされませんでした。後で聞きましたが、飛行機の部品だったそうです。

学徒動員の係は軍隊から派遣された軍人で、私たちの班は西田軍曹という方でした。軍服に五尺（約一五二cm）の身体を包み、腰に

軍刀を下げ、戦闘帽をかぶり、革のゲートルを巻いてきりつとした姿は、私たちのあこがれの的でした。航空隊の七つボタン、海軍の水兵服も魅力がありました。

戦運いよいよ急をつけ、毎日のように警戒警報のサイレンが鳴り響き防空壕（ごう）に逃げました。急降下してくる艦載機は怖かったです。

目的地に爆弾を落とし、引き揚げていくB二九。銀翼を連ね爆音を響かせ、きちっと編隊を組んで飛んで行くのを見て、敵機ながら美しいなあと思ったものでした。

何か月か軍需工場へ通うと交代があって、今度は出征兵士の農家へ行くのです。働き手の大黒柱を赤紙一枚で戦争にとられ、残った老人、女、子供ではなかなかかどりません。今のよう便利な機械があるでなし、すべて人力でやっていました。田植えが終わり田の草取りですが、稲と稲の間に重い重い草取り機を入れて押すのです。一年中で一番暑い

六月末から七、八月の間にするのですが暑くてつらかったです。でもお国のために、炎熱鉄をも溶かす戦場で戦っている兵隊さんのことを思っ、食糧増産に精を出しました。

軍馬が食べる干草づくり。草を刈ってきて運動場一杯に干して送ったこと。兵隊さんの服をつくるのに麻より強いと言われた「チョマ」(川淵等に群生している草)取りに行ったこと等昨日のように鮮明に覚えています。

今、孫娘がその歳になりました。受験勉強に励んでいる横顔を見て平和っていいなあと眺めています。

現在の平和は自然にできたものではありません。あの残酷な戦争で多くの兵隊さんをはじめ、犠牲になられた方が作って下さったものです。歴史を無駄にせず戦争の悲惨さを子々孫々伝え平和を大切に願いたいものです。

終戦の日、八月十五日も今日のように太陽がじりじりと照り、蟬がにぎやかに鳴いていました。